



“ISOLA”を通してみる震災と「風俗」：貴志
祐介『十三番目の人格 ISOLA』（二〇二二年度
社会調査演習報告）

中村，亮善

(Citation)

社会学雑誌, 39:298-307

(Issue Date)

2022-11-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100482595>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482595>



『ISOLA』を通してみる震災と「風俗」

—— 貴志祐介『十三番目の人格 ISOLA』 ——

中村 亮 善

神戸大学文学部人文学科

一 著者紹介

貴志祐介（きしゆうすけ）、一九五九年一月三日生まれ。大阪府大阪市出身。清風南海高等学校、京都大学経済学部卒業後、朝日生命保険に入社。朝日生命保険に八年間勤めた後、退職。フリーで執筆・投稿活動を行い、今に至る。過去には岸祐介名義で作品を投稿していた。

大学四年生の頃に小説の投稿を始め、朝日生命保険に入社した当初は小説を書くのをやめていたが、数年後に意欲が芽生えて執筆を再開。三十歳の時、同僚の事故死をきっかけに自分の人生を考え、執筆・投稿活動に専念することになった。一九九六年、『十三番目の人格 ISOLA』で作家デビューを果たす。著者の代表的な作品として、『硝子のハンマー』（第五八回日本推理作家協会賞

受賞）、『新世界より』（第二九回日本SF大賞受賞）、『悪の教典』（第三二回吉川英治文学新人賞候補）など（貴志一九九六・二〇一七）。

二 本著の位置づけ

『十三番目の人格 ISOLA』は多重人格と憑依現象、阪神・淡路大震災を題材にした四〇一頁にわたるミステリーホラー小説。発行元は角川書店で、発行日は一九九六年四月十八日。第三回日本ホラー小説大賞長編賞佳作を受賞した「ISOLA」が『十三番目の人格 ISOLA』と改題後、刊行される。二〇〇〇年には映画化もされている（同上）。

III 阪神大震災

阪神大震災で壊滅的な被害を受けた神戸地区で、二十歳の賀茂由香里（かもゆかり）は被災者たちの心のケアを目的にボランティア活動を行っていた。賀茂由香里は「エンパス」という能力を生まれ持っており、相手の心から発散される感情の波動を感じとることができる女性であった。ボランティア活動中、被災者の一人である森谷千尋（もりたにちひろ）という入院中の女子高生に出会う。由香里はエンパスによって、初対面から千尋が多重人格者であることに気付き、さらにその中にイソラと呼ばれる異様で危険な人物がいることがわかる。千尋の高校のスクールカウンセラー野村に面会し、由香里自身の抑えきれない好奇心と野村からの依頼により、二人共同で千尋のカウンセリングを行うことになる。

千尋は両親を亡くした五歳の時の事故がきっかけで多重人格となっており、その際に幽体離脱を経験していた。現在では十三の人格が存在し、その十三人の力関係を把握していくうちに、イソラが阪神大震災の直後に誕生したということが判明した。しかし、由香里は仕事を休んでボランティア活動をしていたため、これ以上カウンセリングを続けることが難しくなり、いったん東京に戻り、数か月後にまた帰ってくることになる。

この数か月間に千尋の周りの環境は激変していた。育て親であり、千尋に性的虐待を行っていた叔父の森谷竜郎や千尋をいじめていた二人の生徒、千尋に暴力行為を行った教師が立て続けに心臓麻痺で死亡してしまう。千尋に会うために神戸に戻ってくると、由香里はイソラが大村茜（おおむらあかね、千尋をいじめていた生徒の一人）を脅迫している邪悪な気配を感じる。また、千尋の学校の生徒の話から、方法はわからないものの「自然死に見せかけてイソラが殺人を犯している」と由香里は確信する。

千尋は心を閉ざし、野村も校内の異常事態の対処に追われていたため、由香里は単独で高野弥生（たかのやよい）という女性を調査する。この女性は震災前、千尋や野村に会いに来て、「臨死体験」について聞きたがっていた西宮大学の研究者だった。イソラが体外離脱して人を殺している（あくまでこの時は想像）かもしれないため、臨死体験を研究していた人物に会えば何かわかるかもしれないという思いから調べるが、高野弥生はすでに震災で死亡していた。この時訪れた西宮大学で、高野と同僚であった精神薬理学専攻の真部和彦（まなべかずひこ）という男と出会い、由香里と真部は恋に落ちていく。

高野弥生の研究テーマは「体外離脱」、「臨死体験」であり、真部と共同で研究をしていた。高野は研究への情熱から自ら実験台となり、薬物を服用して「アイソレーション・

タンク」に入るといふ危険な実験を行うようになっていった。大震災当日、いつも通り真部が見守る中で高野は薬物を服用し臨死実験を行い、高野の体は壁の下敷きになってしまう。真部は極度の閉所恐怖症であったため、その場から逃げ出してしまい、高野は「生物的な死」を迎える。しかし、体外離脱した精神体はまだ生きており、高野は誰かの体に憑依しようとしていた。健康な普通の人間は高野を受け入れなかったが、すでに十二もの人格が存在していた千尋は抵抗なく高野を受け入れてしまう。長時間の体外離脱で意識を保つのが精一杯だった高野は、千尋の人格たちに名前を聞かれ、ISOLA（アイソレーション・タンクの頭五文字の英字綴り）とだけ書き残したことで、十三番目の人格であるイソラが誕生した。

イソラは他人の心臓に刺激を与えることで、故意に心臓麻痺を起こすことができた。長期間の体外離脱によって生まれた非人間的な冷酷さと愛していた真部への復讐心、そして千尋のトラウマ全てを背負い込んだ人格であるイソラは、当然話を通じる状態ではなく、真部を殺すために夜な夜な探し回るようになる。全ての状況を理解した真部と、どうしても真部を守りたい由香里は、まだ復興できていない西宮大学でイソラと対峙する。最終的に真部が薬物の力で半覚醒状態になり、イソラを受け入れ、そのまま自殺してしまう。

危険人物であったイソラは由香里の愛していた真部と共にいなくなったが、イソラの非人間的な冷酷さは千尋に伝染していた。イソラの残した置き土産は由香里を戦慄させることになるのだった。



写真1 イソラと由香里が何度も会うことになる武庫川。右はサイクリングロード
千尋の高校である私立晨光学院高校（架空の高校）も武庫川べりにある。（筆者撮影）

四 書評

報告者は次の三点から『十三番目の人格 ISOLA』を考察する。

1. 生存者の罪悪感
2. 由香里のエンパス
3. 「風俗」／性労働について

四・一 生存者の罪悪感

由香里は「アメリカで災害後の心のケアを専門としている NGO である、全米被災者救援組織 (National Organization for Victim Assistance; NOVA) の講習会」がきっかけでボランティア活動として働くようになった(貴志 一九九六・七)。物語の序盤に、阪神淡路大震災発生直後にボランティア活動として現地に赴いた由香里は、衝撃的な事実を目にする。「アスファルトの道路全体が大波のようにうねって」おり、歩くのさえ難渋する歩道で「真正面から、若い男の乗った二百五十 c.c のバイクが走って」くる。「液化化現象で吹き出した大量の泥」や「ペンシルビルディングが傾いている様子」は当時の極限状態のイメージを掻き立てる(貴志 一九九六・三二五)。実際、著者は阪神淡路大震災で被災しており、自身のビジネス本である『エンタテインメントの作り方』でも追憶している。

早朝に起こった激震に、一瞬死を意識したことを鮮明に覚えていた。

周知のとおり、震災の被害は甚大なものだった。盤石と思われていた社会が、ほんの短時間の揺れで一気に崩壊してしまった現実には言いようのないショックを受けた。

(中略)

やがて復旧が進み、精神的にも落ち着きを取り戻すと、そうした体験は非常に稀有なものであり、作品に生かすことができるのではないかと考えるようになったのだ。

(貴志 二〇一七・四五)

私たちは日常の中でこういった災害の話を知ると、今当たり前に生きていることがどれほど素晴らしいことかを実感するだろう。しかし、こういった極限状態では、生きていくということ自体が罪悪感となってストレスを抱えてしまふことがある。作中で、ある老人には明らかに深刻な PTSD (心的外傷後ストレス障害) が起きており、由香里のエンパスによってこの老人は自責の念を持っていることがわかる。後に、この老人は大震災が原因で生存者の罪悪感に苛まれていたのではなく、過去の戦争が原因でその当時の体験がフラッシュバックしていたことがわかる。(貴

志一九九六・一一一十三) 報告者は最初、このエピソードは、由香里のエンパスという能力のイメージを読者に植え付けるためのものだと考えていた。しかし、物語の後半で真部が高野を見捨てて逃げたことに対して自責の念を持っているというシーンがあり、「生存者の罪悪感」はこの物語の一つのテーマとして示唆されているのではないかと再考した。以下は真部の台詞の抜粋である。

「僕は高野さんを見捨てて、ひとりだけ逃げ出しました。(中略)とても、あそこには戻れませんでした。彼女は、もう死んでいると思っただ。実際、ほとんど即死の状態だったようです。ですから……。いや、こんなのは言い訳ですね」(中略)

「僕は、卑怯者です」

(中略)

「……でも、弥生さんは、僕を恨んでいることでしょうね」

(貴志一九九六・二八〇―二八三)

もちろん、こういった自責の念は現実世界では一生解決されることはない。何か悪いことをしてしまったり、迷惑をかけたとしても、その人が生きていれば謝ることができるが、死んでしまった人に謝ることはできない。東日本大

震災で PTSD を発症した人が今でもその症状に苦しんでいるという事例は多い。

では、もし、死んでしまった人が生存者を恨んでいるとわかったら、生存者はどのような行動に出るのだろうか。現実では決して起こりうるのではない事象が、小説の世界では容易に体現される。真部は由香里から「高野がまだ魂となって生きている」ということを聞かされ、絶句し、嗚咽する(貴志一九九六・二八五)。「彼女をあんな実験に引き込まなければ。彼女が、僕に好意を抱いていることを知って、利用したりしなければ……!」(貴志一九九六・三〇八)という真部の心の声からは、真部が今まで以上に後悔に苛まれていることを読み取ることができる。

しかし、高野がイソラとなってまだ生きているという事実を知った後も、真部は絶望せず、むしろ積極的に由香里と共に行動するようになる。

「真部さん。磯良が体外離脱をするのを、防ぐことはできませんか?」(中略)

「可能性はある。体外離脱には、幻覚剤が促進作用を示した。だから、それと拮抗するような薬を投与してやればいいかもしれない。」

(貴志一九九六・三二七)

真部は、由香里と共に、高野が自分を殺そうとしていることを全力で食い止めようとする。体外離脱を防ぐ方法を考えたり、千尋に接触を試みたり（貴志 一九九六・三二八）と、目的のために行動し続けている。ラストシーン手前では、イソラは夜しか体外離脱できないため、日没までに廃墟となっている西宮大学で千尋を探すことになるが、由香里に虚偽の時刻を言ったり（同・三三七）、「どこだ：どこだ：ド・コ・ダ？」とうわ言のようにつぶやいて」（同）いたりするなど、なりふり構わず、半ば狂乱状態で目的を遂行しようとしていることがわかる。ラストシーンで真部は自ら薬物を投与し半覚醒状態になり、イソラを受け入れた後、自殺する。ここで初めて、真部の本当の目的は高野弥生との心中であったということがわかる。絶望せず、積極的に行動していた理由はこれだったのだ。ここに真部の自責の念はみられない。真部は今まで苛まれてきた罪悪感を払拭できて満足したのだろうか。愛していた由香里を残して死ぬことに後悔はなかったのだろうか。このことを読者は想像することしかできない。

「生存者の罪悪感」は救われることはない。もし報われるとしたら、それは破滅という結末をもってしか報われることはない。このテーマは人類にとつて永遠の課題であり、乗り越えていかなければならないテーマでもあるだろう。阪神淡路大震災の経験にみる社会的弱者の心の支援につい

てのレポートでは「被災者のこころのケアには、仲間がいる、家族がいるといった、人の支えが軸になる」ということや「自分の存在意義を見出すことが出来た」ことが自立への大きな一歩であるということを述べている。「生存者の罪悪感」に苛まれている状況というのはすでに死んだ人のことを思い悩んでいる状況である。そういう時に生きている自分や生きている仲間に目を向けさせることが「生存者の罪悪感」から解放される一歩になるのではないだろうか。

四・二 由香里のエンパス

この節では、由香里の「エンパス」について詳しくみていく。由香里は相手の心から発散される感情の波動を感じるエンパスであり、いつでも好きな時に人の心を読めるテレパスではない（貴志 一九九六・二二）。作中では、「他者に対する感情移入の能力が極限にまで達したもの」（同・二二）や「一種の先祖返り」（同・三三七）とあり、真部と由香里の会話の中で、エンパスについて詳しく議論されている。

感情は、一見非合理的だが、実は非常に内的整合性のある合理的な体系を持っている。どういう刺激を加えれば、どういう反応が帰ってくるかは、予測が非常に容易なのだ。（中略）感情というものがお互いの共

通認識にあれば、加害者は、それ以上争うことなく矛盾を収めることだろう。それがお互いの利益になるといふことは、ゲームの理論によって明らかにされている。

(貴志 一九九六・三三五―三三六)

つまり、感情は、それ自体には意味がなく、他者への伝達のために進化してきたのであり、感情の本質や存在理由は『伝達』であるということだ。(貴志 一九九六・三三六) そう考えると、言葉やボディランゲージが未発達であった我々の先祖は感情を直接伝達しており、由香里のエンパスはそういう意味で「先祖返り」ではないのか(貴志 一九九六・三三七)、と締めくくられている。こういった著者の細部までのこだわりは、物語をよりリアルに捉えさせてくれる。

由香里が感情を重視し、「感情そのものには、意味なんか全然なくて、他者への伝達のためだけに進化してきたってこと？」(同・三三六)と困惑を露わにするのに対して、真部が理的に由香里の能力を分析する描写は、ある種、男女の考え方の差を暗示しているとも言える。しかし、生まれながらに女性は感情的で、男性は理性的だとする根拠はない。脳科学的にみてもそういった性差は神話だと言われている(澤田、佐藤二〇一六)。著者である貴志は、このような社会的に作られたであろうステレオタイプを上手く

登場人物の性別に反映させたと考えることもできるだろう。

四・三 「風俗」／性労働について

まず、由香里がいわゆる「風俗」の仕事に就かざるを得なくなった経緯をみていく。エンパスは自分の意思に関係なく発動するため、不便で制約の多い能力となっている。普段は強すぎる感情を読むことがないように薬によって抑えており(貴志 一九九六・三三二)、感情をあまり表に出さない人に対してはエンパスを使えないという描写もある(貴志 一九九六・五八・二二―二一など)。

このエンパスの能力は小学校に上がるまでは後退していたが、中学校に入学する思春期の頃に異常な発達を遂げる。そのせいで、由香里は引きこもりになってしまった。ある時、エンパスによって家族が由香里のことを死んでほしい、厄介者だと感じていることがわかったため、家出を決意する。しかし、貯金はあったものの、薬の処方や宿代、食事代を考えるとどう頑張っても支出が収入を超過してしまつたため、由香里は性風俗で働くことになる(貴志 一九九六・二五―三七)。

由香里は性労働に対するイメージとして「そういうのは、自堕落で、お金さえ貰えば何でもする、卑しい人のする仕事だと思っていたの」(貴志 一九九六・三四―)と語っている。真部との会話の中で、エンパスによって客の感情を

読み取ることに対して「心まで汚されてしまうとと思って、怯えてた」（同…三四二）と話している。しかし、エンパスによって読み取った感情は由香里が想像していたものとは全く逆のものであった。

「わたしはそれまで、ああいうところに来る男の人なんて、心の中が汚れきった人だと思ってたの。（中略）でも、それが違うってわかっただけでも意味があったわ。街を歩いている、ごく普通の人だつて。それどころか、普段の生活の中で満たされない思いを抱えている、寂しい人たちだったのよ。

みんな、頭の中に、さまざまな願望を持っていたわ。（中略）でも、ほとんどの人たちは、内気すぎてそれを口に出せなかったり、そのことで、過去にすごく傷ついた経験を持ってたりして……」

（貴志一九九六…三四二―三四三）

いつしか、由香里の仕事は性風俗に来る男の人たちに、それぞれの悩みに即した言葉をかけてあげるセラピストのような仕事として確立していたのである。

次に現代社会との関わりについて二点考察する。一点目は、風俗産業の機能についてである。十代の女性が、なんかの原因で不登校になり、家族に虐げられ、家出して、

夜の街で働くことになる、という流れは現代社会でもあるだろう。特定非営利活動法人BONDPプロジェクトの橋氏は家出少女のインタビューから「彼女たちは言うんです。（泊め男は）気持ち悪いし嫌だけど、自分と同じ雰囲気があるって。寂しい大人だつて思うと共感してしまうそうです」と語る（東洋経済オンライン「『#家出少女』に群がる『泊め男』の恐ろしい実態」）。もちろん、「泊め男」と性風俗を利用している男とでは差はあるものの「寂しい人たち」という点では共通している。本書では「性風俗」「風俗」という単語は一度も出ていない。報告者は、今までの議論から、著者が風俗を「悩みを抱えている寂しい大人を癒すもの」として捉えているのではないかと考える。ならば、性風俗で働いている人は誰が癒やしてくれるのだろうか。「これまで、彼女は大勢の男たちの心を癒してきた。だが、彼女の心を癒してくれる人間は、一人もいなかったのだ」（貴志一九九六…三四七）由香里は真部に自分の生い立ちを全て告白し、真部がそれを受け入れると、「彼ならば、由香里を癒してくれるかもしれない」（同）と思っている。「悩みを告白し、受け入れてもらう」ことは由香里が普段風俗でしていたことを真部にただされただけではないだろうか。由香里も「悩みを抱えている寂しい大人」であり、自分を受け入れてほしいと願うただの人間であったのだ。常に人間は「誰かに受け入れてもらいたい」とい

う承認欲求を持っている。泊め男の例も、性風俗も、体を受け入れてもらうことで誰もが自分の胸の内に抱えている寂しさを紛らわそうとしているのではないだろうか。

二点目は女性側と男性側、両者からみる風俗への偏見である。家庭内不和で家出をした由香里だが、本著では被害者やかわいそうな子として描かれてはいない。千尋の多重人格のことを野村に聞こうとする好奇心や勇氣、イソラを調査しようとする行動力、そして「わたしは、世間からどう見られようと、自分の仕事に誇りを持ってきたわ。」(貴志一九九六・三四六)という由香里の発言からは仕事への熱意が感じられる。ここから、由香里は二十歳にして自分のアイデンティティや信念を持っていることがわかるだろう。雑誌『女子SPA!』の記事によると、家出少女で売春をして生活をしていた「里奈」は

自分たちはお金で買われているのではなく、『売ってやっている』、女の性を売るのは生きるための戦略で、それを選ぶか選ばないかは『女の自由』

(中略)

そうやって、選択的に自由を得ているから、自由と不自由の天秤のバランスがとれていれば、被害者ではない。

(女子SPA! 『夜の街で生き抜く家出少女たちは、

かわいそうな被害者なのか』)

と述べている。家族から解放されたいと思って家を出た里奈も、由香里と同じように仕事に対する信念やアイデンティティを持っている。風俗で働いていることは「世間的には、胸を張って言えるようなことじゃない」(貴志一九九六・三四六)と由香里は言う。しかし、そこで働いている人々にはその人なりの思いがある。女性からも男性からも「風俗で働く人はかわいそうな被害者だ」という偏見はあるだろう。しかしその実態は、そういった偏見を意にも介さないような風俗で働く人なりの生き方があるのだ。そこには女性の強かさや逞しが見え隠れしている。

文献

BRAIN CLINIC「PTSD (心的外傷後ストレス障害)

とは? 症状やきっかけ、原因について」<https://tokyo-brain-clinic/psychiatric-illness/ad/1245> (最終閲覧二〇二二年八月二三日)。

女子SPA! 『夜の街で生き抜く家出少女たちは、かわいそうな被害者なのか』(二〇二〇年一月六日) <https://joshi-spa.jp/974934> (最終閲覧二〇二二年八月二三日)。

貴志祐介、一九九六『十三番目の人格ISOLA』、角川書店。

——、二〇一七『エンタテインメントの作り方——売れる小説はこう書く——』、KADOKAWA。

市川明日美ほか「阪神淡路大震災の経験にみる社会的弱者の心の支援」『国際文化ジャーナル』十六号、<https://www.world-ryukoku.ac.jp/~fumis96/docs/05semrep.pdf>（最終閲覧二〇二二年八月二三日）。

澤田玲子・佐藤弥、二〇一六「男脳vs女脳?—感情処理における行動と脳の性差」『心理学ワールド』（七五）日本心理学会。

東洋経済オンライン「#家出少女」に群がる、泊め男の恐ろしい実態（二〇一九年二月二四日）<https://toyokeizai.net/articles/id/319675>（最終閲覧二〇二二年八月二三日）。